

CONTENTS	1	ニュース&レポート	日本市場参入に向け新たなチャレンジ
	2~3	専門家の声	日本と途上国の違いから学ぶ～JICA大阪太陽光発電導入支援研修の経験～
	4	講師の声	メコン地域観光振興研修のあれこれ
	5	協力企業特集	ゼロ精工(株)／東洋化学(株)／(株)金市商店(ミール・ミイ)
	6	PREXスタッフのコラム／PREXだより(インターンシップ受入れ／人の動き)	

## ニュース&レポート

# 日本市場参入に向け新たなチャレンジ



中米の食材を日本風にアレンジしたJICA大阪食堂のシェフのレシピ提案に、研修員も驚いていました。

### 受入研修 貿易振興

#### 中米カリブ地域・日本貿易振興のための キャパシティ・ディベロップメント研修

2011年2月17日から3月15日まで、ドミニカ共和国、コスタリカ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグアの5カ国を対象に「中米カリブ地域・日本貿易振興のためのキャパシティ・ディベロップメント研修」を実施しました。同研修では、輸出振興を担当する行政官や団体職員が9名来日し、日本の食品市場の特徴や貿易システム(流通・関税・法制度等)を学び、現地企業への支援計画を作成しました。

### 3カ年を通じた研修設計

本研修は2009年度から2011年度まで実施予定ですが、3年間を通じて研修員を派遣する組織を固定化し、研修での学びと成果を次年度の研修員に伝えることによって、実績を積み上げていく計画に基づき実施しています。

昨年度は、主に日本への輸出に必要とされる基礎的な知識を学ぶとともに、輸出の可能性の高い自国産品を様々な視点から検証してもらいました。今年度は、昨年度の研修員が選んだ自国産品について日本市場における強み・弱みの考察を再度吟味し、これらの商品が日本市場に参入するための計画を策定することを目標としました。

研修員を派遣する組織の固定化が上手いかなかった組織もいくつかありましたが、同じ組織から派遣され、組織的な戦略を立てるための情報収集の場として研修に取り組んでくれていると報告してくれ

た人もいました。

### 来年度に向けて

昨年の10月、コスタリカとニカラグアへ出張した際には、現地の貿易振興を担当している機関を訪問するとともに、帰国研修員から情報収集することによって、これまでの研修の成果や今後のニーズを把握することにつながりました。コスタリカ貿易振興公社(PROCOMER)では、「これまでの研修で日本市場に関するデータを蓄積することができ、企業への情報提供に活かしている。今後はこれまで得た情報を更に具現化していくことが必要だと考えており、日本での見本市への出展支援も検討していきたい」とのコメントをもらいました。

このような現地のニーズを踏まえ、来年度は研修期間中に日本最大の食品見本市「FOODEX JAPAN」へ出展することを確認しています。見本市に出展することにより、日本市場参入に必要な手続きやバイヤーが要求する品質の基準などを実践

的に学ぶことができ、日本市場に参入するための具体的な戦略の立案が可能となります。

見本市出展へのチャレンジは決して楽ではありませんが、中米・カリブ地域にとって日本市場参入に向けての大きな一歩になると期待しています。

— 国際交流部 コースリーダー 北村 圭

### 研修概要

研修名	中米カリブ地域・日本貿易振興のためのキャパシティ・ディベロップメント研修
実施期間	2011.2.17(木)～3.15(火)
研修参加者	中米諸国で輸出振興に携わる行政官、もしくは輸出振興機関の職員
委託元機関	独立行政法人国際協力機構(JICA) 大阪国際センター

お世話になった方々、企業・団体(敬称略、訪問順): 食品コンサルタント 上田栄一講師、ヒューテック西龍治社長、日本貿易振興機構(JETRO)、大阪市中央卸売市場本場、関西空港検疫所、カタギ食品、フルーティヤフーズ、南アフリカ大使館、元JICA 渡邊裕司専門家、ユーキトレーディング、イオン商品調達、パルタ、アスク、日本水産物貿易協会、流通科学大学 向山雅夫教授、生活協同組合コープこうべ、UCC上島珈琲、赤尾屋、金市商店、森永製菓、バリーカレボー・ジャパン、ロックフィールド

# 日本と途上国の違いから学ぶ～JICA大阪太陽光発電導入支援研修の経験～

受入研修 環境

## 太陽光発電導入支援研修

地球温暖化ガス削減の切り札として日本で使われている太陽光発電は、未だに未電化地域が存在する途上国では電化の促進手段として使われており、JICAはこの分野で1990年代から途上国を支援してきました。JICA大阪国際センターでは2009年から太陽光発電の研修を始めましたが、社会的にも経済的にも途上国とかなり異なる日本では太陽光発電の役割も途上国と異なります。このような太陽光発電の研修を日本で行い、いかに有意義な研修にできるのか、そしてこの研修を日本で行うことの意味は何かについて、この研修のコースリーダーを務めていただいているJICA国際協力専門員の林俊行氏からご寄稿いただきました。

写真1) GSユアサのパワーコンディショナーの工場を見学。  
整理整頓が行き届いた工場に研修員は一様に感心する。



### 途上国の現場経験を 集団研修で生かしたい

夜空を大きく横切る天の川と無数の星、星明りだけで木々の陰がくっきりと地面に映る。私はマラウイ共和国ンチシという小さな田舎町で1979年から2年間、青年海外協力隊理数科教師として未電化の生活を経験した(写真2)。帰国後、修士を取り電力会社の子会社に就職したのが途上国電力開発の仕事に携わるきっかけだった。この会社で様々な経験を積み、アメリカの大学院で二つ目の修士を取った後、国際協力専門員になったのは1995年。専門員は(独)国際協力機構(JICA)が内部に確保している専門家集団で、様々な分野で90名前後が国内と海外で働いている<sup>(\*)</sup>。専門員になって5年目の1999年、幸運にも今度は地方電化計画アドバイザー(JICA 専門家)としてマラウイに3年間派遣された。1964年、東京オリンピックの年に日本は100%電化を達成したが、今でも世界の中では4人に一人が電気のない

生活を送っており、この割合はアフリカで特に高い(写真3)。私はマラウイで地方電化の現場経験をたくさん積み、帰国後はこの経験を生かしながらアフリカ等で技術協力の仕事をしてきた。そんな中、2009年にJICA大阪センターから太陽光発電(PV: Photovoltaic)の研修に協力して欲しいという依頼があり、途上国の現場経験を国内の仕事でも生かせたらと思い引き受けた。

### 途上国における太陽光発電の課題

広大な大地に農家が点在するアフリカ、大海原に大小の島々が点在するフィリピンのような島嶼国、これらの国々ではその場で発電し電気を使うことのできるPVが地方電化の重要な手段になっている。途上国の未電化地域では50ワットから100ワット程度のPVパネルで昼間バッテリーを充電し、夜間に小さな蛍光灯やラジオ・白黒テレビなどの電気器具を使うことが一般的で、ディーゼル発電と比べて駆動部分が無く簡単に設置できるため、途上

国の電化促進手段として世界銀行やJICAなどの政府開発援助機関そしてNGO等が普及に努めてきた。しかし科学技術に疎く電気を使ったことのない村人が使うため適正に維持管理されず、正しい知識と経験を持たない人でも設置できてしまうため不適切に設置されて短期間で使えなくなるなど様々な問題が発生しているのが現状で(写真4)、JICA大阪で始まったPVの集団研修は途上国のこのような問題を解決するために人材育成を目的として始まった。

### “受容型”から“思考型”へ

日本でPVの研修をやるといっても、既に100%電化された日本では屋根に載せた3キロワット前後のPVパネルを系統連系で使っており、途上国と使い方が異なる。日本で使い方の異なるPVの研修を途上国から来る研修員にとって有意義なものにするにはどうしたらいいのか、これがこの研修を検討する上で直面した重要な問題だった。日本と途上国で共通した



写真2) ンチシ・セカンダリースクールの教員宿舎。  
暗闇の中では灯油ランプでも結構明るい。



写真3) モザンビークとの国境にあるマラウイ・ンザマ村。  
熱心なインスターがいるこのミッション・クリニックでは  
外務省の草の根無償でPVを設置した。



写真4) バオバブの木の下にPVパネルが設置されている。  
雨季に葉が茂ると影となったパネルは発電できない。

課題は無いのか、ここで気が付いたのが補助金制度や人材育成、技術基準整備などのPVを普及するための仕組みである。そこで日本のPV産業発展の歴史と現在のあり方を研修員にケース・スタディーしてもらおうという考え方でこの研修を組み立てることにし、日本のPV産業の歴史的・構造的解説、そしてノレッジ・マネジメントとシステム思考というマネジメント系の研修を組み込み、また講義や企業訪問などの経験を反芻し研修員間の情報・意見交換をする場として振り返りの時間を設けることで“違いから学ぶ”ことを強調し、“受容型”から“思考型”の研修になるよう工夫をした。

### 能力開発の一環としての集団研修

この研修は2010年2月、9月そして2011年2月と既に3回行われた。関西経済連合会との連携、そしてPREXの熱心な交渉と調整により大企業だけでなく中小企業やその他関係組織の訪問も行い、優秀な研修監理員の貢献も相俟ってこの研修はかなり高い評価を得た。しかしこの研修は研修員にとってどのような意味があったのだろうか。想像するに、この研修は彼らの能力開発に微力ながら役立ったのではないか。ある人の能力は、その人が様々な課題にどう適正・効果的に対応し問題を解決し得るかという対応力によって示されると思われる。その対応力を養うためには、いろいろな経験をして様々な見方や考え方を自分のものにすることが必要である。



写真5)  
三洋電機のソーラーカー  
の前で記念写真。

写真6)  
千葉県にある京セラの  
佐倉ソーラーセンター  
でポンプを見学。



この研修では日本のPV産業を研修員にケース・スタディーしてもらうことで、研修員がPV分野における様々な見方や考え方そして課題に気が付き、帰国後にPV関係の仕事に携わった時に役立つ対応力を涵養した、つまり研修員の能力開発に微力ながら貢献したと理解できる。

### 新たな挑戦

この研修では関西経済連合会が重要な役割を果たしているが、世界に名の知れた大企業や中小企業を訪問し工場を見学して意見交換をすることで、研修員は“日本ブランド”を直接経験し肌で感じたと納得する。“日本ブランド”を直接経験したという研修員の思いは帰国後も続き、この研修はこの意味で日本のPV産業の様々な資源を途上国の人々に知ってもらうための場にもなっている(写真1、5、6)。そして特筆すべき点は、途上国には広大なビジネス・フロンティアが広がっているということである。エネルギー・環境分野はこれから途上国が経済発展する上で特に重

要な課題で、JICAは開発援助の仕事で豊富な経験を積んでいる。このJICAの経験と関西企業のビジネス資源を途上国の開発の文脈のなかでうまく組み合わせるダイナミックな協力を展開する。近い将来、これが関西の企業とJICAにとっての新たな挑戦になることが期待される。新興国が世界経済の中で台頭を始め、アジアどころかアフリカの国々もかつてのアフリカではなくなってきたのだから。

執筆者: 林 俊行 氏  
(独)国際協力機構国際協力専門員



1953年生まれ。長期や短期のJICA専門家としてマラウイ、シエラレオネ、ルワンダ等に滞在。その他、JICAの技術協力プロジェクトの準備・計画や実施の技術的監理に携わると共に、集団研修の講師やコースリーダーを務めている。

※国際協力専門員については、私たちがどのように専門員になったのか、途上国ではどのような課題があり専門員はどのように課題に取り組んでいるのかなどについてまとめた書籍「国際協力専門員:技術と人々を結ぶファンリテータたちの軌跡」(株)新評論2008年を参照ください。

# メコン地域観光振興研修のあれこれ

受入研修 観光振興

## メコン地域観光振興研修

PREXは、国際協力機構(JICA)大阪国際センターから委託を受け、「メコン地域観光振興」研修を、3月2日より3週間実施しました。本研修は、メコン地域で観光振興に携わる行政官9名を対象に、日本の観光立国に向けた取り組みの紹介を通じ、メコン地域内観光の振興策、特に日本からの周遊観光促進について討議することを目的としています。ほぼ全行程に同行し、討議をまとめていただいたコースリーダーの名古屋外国語大学 桂井講師からご寄稿いただきました。



メコン地域の地図を前に、メコン周遊観光の魅力や観光行政の課題などを話し合う研修員。左端が桂井講師。



名古屋外国語大学  
現代国際学部

桂井 滋彦 氏

メコン地域の国々は、私が日頃接する学生達に尋ねてもその位置を正確に示すことは難しいようだ。このCLMVT(カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム、タイ)は海外旅行の行き先として一部の国や都市を除くと馴染みの薄い地域でもあるので、この地域への関心を高めたい。

### 研修は大切な資産に

観光促進事業は、観光地(研修員側)と旅行者(日本側)を結びつけることなので、研修による双方向の意見交換は大変に有意義である。海外への送り出し旅行会社で「日本のお客さんは定時運行を当然と思い、海外でも決められた通りの旅程で巡ることを望み、いわば計画したスケジュールの答え合わせの旅行」とか、「単

なる観光以外の体験イベントを求める」などを聞き、マーケットに立脚した目線が必要であることを再認識した。研修員も3週間に亘り日本に滞在し、自国を改めて外から見直す良い機会になっている。研修事業は、広域観光推進の視点でもお互いの協力・連携の可能性を探り、アイデアの共有の場であり国際会議の側面もある。また、研修員の日常業務は歯車のひとつであり、全体を眺める機会は少ないので、日本での観光事業ではあるが全体像を捉える好機になる。研修員同士が専門家として意見交換が出来たことは、個人としての大切な資産になるであろう。

### 多様な文化が重なり合う複雑な地域

この地域は多数の民族が歴史的に広く国境を挟んで住んでいて、多様な文化が重なり合い複雑な表情を見せる。人々は日常生活の中で周辺国へ往来し、外国という意識もなく生活している国もある。我々が耳にする国際交流は外向きの顔を意識したものや捉えがちであるが、この陸続きの地域では普段着の付き合いである。

研修員は少数民族観光について貧困撲滅や雇用創出ばかりではなく、観光を通してのボランティアや地域の誇りの伝承について理解を深めたが、Community-based tourismは今後もこの地域の中心的な課題である。この研修は私にとっては民族や国境とは何か、西洋の植民地時代を過ごした人々にとっての伝統とは何か、等について意識させられる場でもある。

国境通過の迅速化・簡素化の議論では、国境警備の軍務を経て現在は観光推進の仕事についている研修員にとっては、両極の課題であっただろうと推察する。

フィールド研修の際は旅館に宿泊をしたが、就寝時・起床時に布団の上で敬虔な祈りをささげる研修員を目の当たりにして、日常の中での身についた宗教感について考えさせられるものがあった。また課題の準備やレポートに深夜まで取り組み、きわめて真面目に受講していただき感心をした。東日本大地震の発生時、日本に滞在了経験は、日本に対しての関心とともに、研修員の心に強く残ることと思う。



体験型観光の事例として、福寿園宇治茶工房を訪問しました。石臼をゆっくり回すこと20分、おいしい抹茶が出来上がりました。

### 研修概要

研修名	メコン地域観光振興研修
実施期間	2011.3.2(水)~18(金)
研修参加者	メコン地域で観光振興を担当する中央または地方政府機関職員9名(カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムから2名、タイから1名)
委託元機関	独立行政法人国際協力機構(JICA)大阪国際センター

お世話になった方々、企業・団体(敬称略、訪問順): 名古屋外国語大学 桂井滋彦講師、国際機関日本アセアンセンター、甲南女子大学 大倉恒雄講師、歴史街道推進協議会、京都府 商工労働観光部、フィリピン共和国観光省 西日本支局、近畿日本ツーリスト、エーベックスインターナショナル大阪支店

## 協力企業特集

PREXでは、年間30件前後の研修を国内で実施し、大変多くの訪問先にご協力いただいています。その中から毎号、特色ある企業などをご紹介します。

379件

うち新規 61件

ゼロからの成功で  
超精密部品を製造

## ゼロ精工(株)

本社=尼崎市南初島町  
HP=<http://www.zero-seiko.com>

「ウズベキスタン日本センター  
ビジネス実務研修」で訪問

同社は、破産宣告を受け、ゼロからの出発で成功しよう! という強い意志の下に“ゼロ精工(株)”と社名変更され、たった5年で近畿経済産業局の「KANSAIモノ作り元気企業100社」に選ばれた驚異的な超優良会社です。技術力の高さは世界からも認められており、航空機や建設機械の超精密部品を主に製造されています。ウズベキスタンでは倒産する会社が多いため、会社立て直しの考え方が非常に参考になったと研修員は感激していました。岡本社長にその旨お伝えしたところ、昨年10月にもお邪魔したばかりであるにもかかわらず、「また何かお手伝いできることがあればお申しつけ下さい」との大変有り難いお言葉を頂戴いたしました。貴重な経歴をお持ちなので、きっとまたお願いすることになるでしょう。



岡本社長に研修員からお礼の記念品を贈呈し、ハイポーズ!

天然ゲルパッドによる  
高性能絆創膏を開発

## 東洋化学(株)

本社=滋賀県蒲生郡日野町  
HP=<http://www.toyokagaku.com/>

「中小企業振興政策(C)」で訪問

同社は、滋賀県工業技術総合センターのレンタルラボに入居し、県の支援も活用しながら傷口を早くきれいに治す国産初の「湿潤型」絆創膏を開発・商品化し、「KANSAIモノ作り元気企業100社」に選定されました。研修では、新技術を活かした製品開発の過程、公的機関による中小企業への技術支援の必要性・具体的なメリットを企業の立場から説明いただき、産業界が求める技術開発ニーズに対応する公的機関の役割を現場で実感することができました。全身を覆う防塵服に着替え、工場内への異物の侵入をシャットアウトするエアシャワー室を通して工場見学もさせていただきました。同社の高い技術力と優れた生産技術、万全の品質管理体制に触れ、企業の成長・発展における技術開発の重要性を再認識できました。



技術開発部の皆様と全員で記念撮影。前列中央が当日ご案内いただいた部長の山本敏幸氏

京都の中心にある創業  
80年のはちみつ専門店

## (株)金市商店(ミール・ミイ)

本社=京都市中京区  
HP=<http://www.miel-mie.com/>

「中米カリブ地域・日本貿易振興のためのキャパシティ・ディベロップメント研修」で訪問

金市商店(ミール・ミイ)は京都の三条通に店舗を構える、蜂蜜専門店です。他社にはない国産蜂蜜を中心に、直接海外で買付けた品質の高い蜂蜜や独自で企画・開発したオリジナルの季節限定の蜂蜜等も交え、多種多様な商品をラインナップしています。また、蜂蜜酒やロイヤルゼリー、プロポリスなどの蜂蜜関連商品も販売しており、店舗スタッフの丁寧な商品説明によって、自分の好きな蜂蜜を購入することができます。研修当日は、業務部の宇野伸吾部長が同社で販売されている蜂蜜のサンプルを見せながら、日本人と蜂蜜の歴史や日本人好みの蜂蜜の特徴について教えてくださいました。蜂蜜で作ったプリンジャムや桜の花びら入りの蜂蜜などの同社オリジナル商品から、研修員は商品開発のポイントを学びました。



プレゼンテーションの後、蜂蜜酒「ミード」を試飲させてもらう研修員。

## 途上国のために、日本・関西のために

「中小企業支援策として、このような活動を始めました」「行政官としてスキルアップのため海外留学しています」といったメールを研修員から時々受け取ります。帰国した研修員が一生懸命に頑張っている様子は「日本での経験や知識が役に立っているのかな」と励みになります。高校3年の夏から国際協力に興味を持ち、「ご縁」でPREXに就職して4年が経ちました。この4年間、研修員とその国の役に立つことができているのか考えながら迷いながら、「できること」を探す日々です。

東日本大震災が起きてから1週間、研修員からの日本に対する応援メッセージが毎日のように届きました。11日地震発生後は数時間後に何通もメールが届き、私が帰宅後ニュースを確認する前に震災の大きさを知ったほどです。メディアでも各国からの支援が報じられていますが、日本人が継続してきた支援は日本への愛着へと実を結んでいます。そして、PREXの20年間の活動は途上国のためだけでなく、日本や関西地域への愛着を育ててきたのだと大きな力を感じます。途上国のために、ひいては日本・関西のために、私ができることは何かを考えながら、日々努力を続けたいと思います。

— 国際交流部 コースリーダー 奥村 玲美



各研修員が各国の旗の前に並ぶ(筆者左端)

### PREXだより

#### インターンシップ受入れ

PREXでは、交流活動として留学生、日本人学生のインターンシップを年間3名程度受入れています。今回は立命館大学 原さんの体験をご紹介します。

#### 将来につながる7週間

原 祥子 立命館学部国際関係学部 2回生  
(受入期間：2011年2月7日～3月25日)

PREXの一員として活動させていただいた7週間。その経験は、将来国際協力の舞台で働きたいと思う私にとって、大学では得ることのできない様々な「学び」を与えてくれました。

「人生は縁とつながりでできている。人とのつながりを大切にしよう」これは、私がインターンで得た「学び」の一つです。人と人がつながり、協力し合うことによって次へのチャンスが生まれる。例えば、企業、講師の方、JICAの方と研修員の方をつないでいるPREXも、そのつながりや協力によって人材育成・国際協力を行うことができる。つながりを大切にす気持ちを持ち続けよう。インターン中の様々な人と出会い、お話を聞いたことでそう思うようになりました。それは、この後私の人生に大きな影響を与え続けると思います。

また、実際の人材育成の国際協力の場を見、お話をうかがうことによって、将来への展望をより具体的に描くことができるようになりました。自分は将来何がしたいのか、ずっと考え続けていましたが、このインターンを通して今の答えを得ることができました。将来は専門家として国際協力の舞台で働きたいと思います。

最後に、様々な方々の支援があったからこそ、様々な学びを得、成長することができたと思います。温かい目で見守り手助けしてくだ

さったPREXの方々、インターンで出会った全ての方に感謝の気持ちでいっぱいです。このインターンで得た経験を次につなげ、将来の目標に向かって頑張っていきたいと思っています。



#### 人の動き【着任】



浜口 好康…国際交流部 担当部長  
2011年4月1日付／サントリーホールディングス(株)より出向  
このたびPREXでお世話になることになりました。これまでではコンピューターシステムの開発、生産資材の購買、工場での総務や経理といった仕事をしてまいりました。これから携わります国際交流、国際貢献という分野は大きな意義のある仕事であると同時に、私にとりましてはまったく未経験の世界であり、新しいチャレンジにワクワクしております。20年という節目を迎えたPREXの活動をさらに発展させるために、これまでの企業での経験を生かしながら、少しでもお役に立てるよう精一杯努力してまいります。なにとぞよろしくお願いいたします。



藤沢 勉…総務部 担当部長  
2011年4月1日付／ダイキン工業(株)より出向  
4月1日付けでダイキン工業株式会社経営企画室より出向し、PREXの総務部に所属することになりました。3月末までの3年半は、PREXとかかわりの深い関西経済連合会に勤務しておりましたが、主担当業務は地方分権の推進で、国際関係や人材育成の業務に携わった経験はありません。総務という仕事も初めてです。わからないことばかりですが、少しでも早く、一人前の仕事ができるよう、PREXの役職員のご指導のもと、努力していく所存です。関係機関の各位におかれましても、ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



森 集…国際交流部 担当部長  
2011年4月1日付／大阪ガス(株)より出向  
大阪ガスから出向でPREXにお世話になることになりました。大阪ガスでは都市ガスの仕事に加え、いくつかの子会社で勤務しました。初めての社外への出向になりますが、他企業でいろいろ経験された皆様と、あるいはPREXで長年にわたり国際交流に貢献された皆様と、一緒に仕事ができますことをたいへん嬉しく思っています。以前3年間海外駐在経験がありますが、あらためて巡って来た国際交流のチャンスに気合いを入れる毎日です。一日でも早く伝統あるPREXの一員として活躍したいです。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

